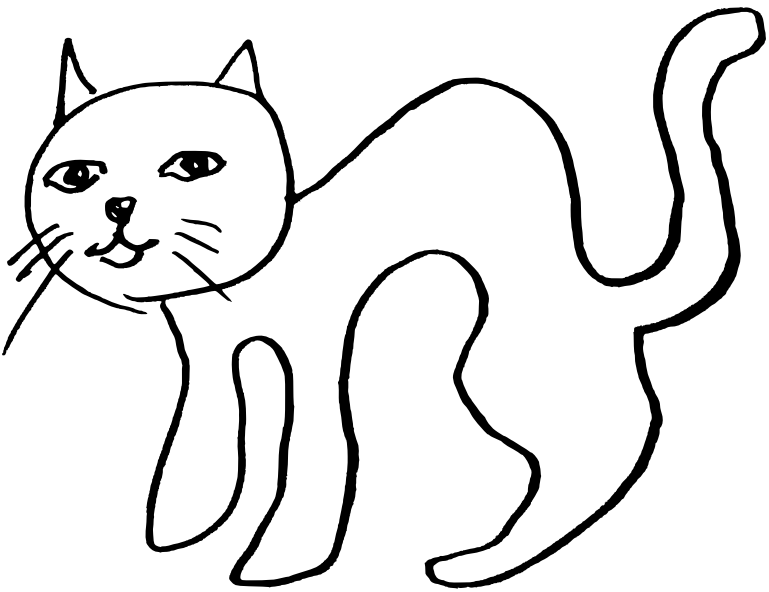
odai

magazine

vol.7



■えいがのこと『ANNA』

今回は映画を見ることなく映画のことを書くという画期的なことをしてみます。休みの日に外に出て、ベンチというか、植木の淵みたいなところに腰掛けながら。

この映画は、大学を辞めたあとにとあるバンドにいたころ、フロントマンの人がゲンスブールが好きだったのでよくそうゆう話になって、なくしてしまったけどDVDを買って見た。サントラは今でも結構定期的に聴く。pas mal pas mal du tout~ とブリアリが歌っているのは結構頭から離れれなくなる。今思うとフランス的ミュージカル映画を感じるもののルグランのそれとは違ってて、アンナカリーナも当時はそれは美しく、sous le soleil exactement は本当に素晴らしい曲だと何度聴いても思います。

ゲンスブールはいいですね。特に僕は一時期 yéyé というのにはまっていましたので、ゲンズブールにはそこでもお世話になっているわけです。あらすじとしては灯台元暗しという映画。書いてたらものすごく見たくなってきた。

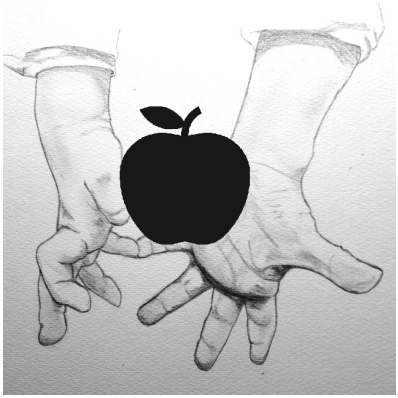
『ANNA』
'67　フランス
監督 Pierre Koralnik
音楽 Serge Gainsbourg

■128段の階段のうた

2段目

長谷川至洋

その時気づいた。今日という日の意味。20代が終わる日なのだ。テーブルの上には、ユズコにもらったリンゴが置かれていて、空飛ぶリンゴをふいに思い出す。記憶はいつも夕暮れで、人口の水辺からくる風にあたりながら、広告募集の広告を眺めていた。それが僕の20代だった。



■ある日の夢 -2012.01.20-

杉浦俊介

誰かと三人でどこかの土手に夜。
ふたりはキスに夢中で、僕は空をみてた。
そんなに遠くない空にへんなのが。
見てたら赤い鬼というか、変な面の頭が雲の隙間に。
キスするふたりに言ってもききもしない。
でも、空にはつぎつぎと龍みたいのとか、変なのが。
軍事兵器じゃないか？と町に下りると、旧型ロボットは足を吊るされてる。
奴隷みたいな人たちはアキレス腱をつくロボットに押されてた。
少年が助けようとかけてったらバババっと床のマシンガンが打ってきた。
みんなは鎧を着てるから平気。

■山のこと／雲のゆめ

長谷川至洋

ボガンボスの名曲「夢の中」の歌詞にこんな一節がある。

「欲しいものは　いつでも　遠い雲の上」

まったくそのとおりなのであって、手が届かないというもどかしさは人生につきまとうものだと思う。なにも欲しがらなければ、済むことではあるのだが。

ところで、山に登ると、ふっと雲の上に出ることがある。眼下に見下ろす雲。雲海というのもすてきな表現だ。

たぶん、一般的な人間が雲の上に出るには2つの方法しかない。それは山に登るか、飛行機に乗るか。そこには違いがあって、飛行機でぽんと雲の上に出ても、我々は機体に密閉され、開閉のできない窓から雲の海を眺めるのみである。しかし山に登る場合は、一歩一歩登り詰めて、雲を見上げ、雲の中に入り、やがて雲の上に出るというプロセスがあるのがいい。

そして山登りにおいて雲の現れ方はそればかりでない。ずうっと雲の中を歩き続けることもあれば、雲がひとつもない日もあれば、山頂に達してもなお雲は頭上にのみ浮いていることもある。高山の稜線から水平に眺める夏の積乱雲もまた格別である。雷は怖いけれども。

行雲流水という言葉から禅の修行僧を「雲水」を称するように、雲の流れを見つめているとそのとらわれのなさにはっとすることもある。青空を一人ゆく浮き雲に重ね合わせるものは人それぞれであろうか。私には、古い思い出を乗せた優雅で哀しい残響のようにも思えてくるのである。雲を越え、雲に近づき、山頂もまた夢の跡なのかもしれない。

雲といえば、カウリスマキの『浮き雲』を観たいと思った。でもそれは映画のことなのでまた別の話題である。

■こさえる。

こさえるって本当に気持ちこもってることばだなって思いました。気持ちこさえる。
気持ちこさえだしたら、それはもう、工芸品みたいだわ。
工芸品って日本で特別なもの。つまりお気づきのように、こさえる＝おもてなし。
おもてなしのためにこさえているようなもの。私たちはなんでもかんでも
おもてなしという日々のプレッシャーに押しつぶされそうになりながら生きている。
一般的には適度なストレスは健康にいいようなので、信じたい。
DENTO。わたしだってノンアルコールビールのようにフリーになりたい。
そう、誰だって。気持ちよくお散歩をしている犬のしり。
山の上には鳥。鳥たち。そんな景色は私たちの疲れを癒してくれる。
山を越える、超える、越える、、こさえる、、いや無理に持ってこれなかった例。

滝沢朋恵

■おだいのわたし（6）文学と音楽

中村安伸

3月14日にここブリュッケで開催された「文学と音楽、言葉とメロディー、エレクトロニカ・グリッチノイズ」と題されたライブがとても面白かった。ゲストのスッパマイクロパンチョップ氏は、ここでの演奏は二度目で、前回はギターの弾き語りだったが、今回はシンセサイザーの演奏に歌というスタイルだった。これも弾き語りということになるのだろうか？　ミシン台に載せたMC-505の各種コントローラーを、無駄のない動きでてきぱきと操作する姿は熟練した職人、とくに複数のプロセスをタイミングよく捌くという点では料理人を思わせた。そこに歌も入るのだから鬼神のような大活躍ぶりである。

さて小野修氏によるパフォーマンス「文学と音楽」は、タイトルの語感から重く前衛的なものを想像していたが、意外なほどポップに感じられた。小野氏による爽快な電子音楽に、近代文学のマスターピースから引用された英語のフレーズが、詩人の深澤紗織氏のリーディングとヴォーカルによって載せられてゆく。さまざまなデバイスを操る諏訪創氏。タイトなドラムがすばらしかった。

ドストエフスキーや三島を含め、すべての作品を英語で演じたことについて小野氏は、西洋を起源とするポップミュージックに日本語を載せることの困難さを語った。また、歌詞として言葉を使えば、そこに意味は生じてしまうのだから、せっかくなら自分の愛好する文学作品から好きなフレーズを引用しようという内容のことも言っておられた。昨年末小野氏とはじめてお会いしたとき、俳句のリズムについて深い分析をされていて驚いたことを記憶している。そのことからも、彼が日本語のリズムを考え抜いたうえで、英語を選択したことが伺える。ポップミュージックの歌詞には英語と日本語のどちらがふさわしいか？　その問いに正解はないだろうが、今回の小野氏の選択はひとつの有効なアプローチであろう。実際出来上がった作品はポップで品の良いものであったとともに、他に類のない硬質な世界観をそなえた好ましいエンターテイメント作品と感じられた。

もちろん文学作品から引用した断片的フレーズのみで、作品全体にがもたらす重厚な存在感に匹敵することは不可能だし、日本語を母語とするリスナーが、英文から精妙なニュアンスを感受することもまた難しい。題材となった作品を読んだことがあるかどうか、作者や作品の背景についての知識があるかどうかによって、リスナーが受容できる内容や連想できる範囲が異なるという問題点も指摘できるだろう。

それらに関して小野氏は、曲の間にレクチャーを行なうことでカバーしようとしていた。彼の講義を聞いていると、楽曲を楽しむための解説という範囲を超え、このパフォーマンス自体を、文学作品の豊穣な世界へと誘う入口にしようという意図が感じられた。文学作品に匹敵する音楽を作ろうということではなく、言葉の海からフレーズを借りることで独自の音楽作品を完成させるとともに、その音楽作品自体が文学作品への扉を開く鍵にもなるという、ふたつの達成を意識していたということだろう。正直に言うと、実際にパフォーマンスを目にし、曲を耳にするまでは、「文学と音楽」というタイトルが素朴で大仰すぎて、抵抗感もなくはなかった。しかし、文学と音楽とが、小野氏のなかで主従なく並立しているなら、他のタイトルを選ぶことは難しかったのかもしれない。

最後には小野氏の楽曲に乗せて、深澤氏が自作の日本語詩を朗読した。コントロールされたパフォーマンスで作品世界の創造に寄与してきた深澤氏が、ここでは主役となって文字通りセンターに立っていた。巻紙に毛筆で記された詩を、一行ごとに巻き取りながら読み上げる動作は、スッパ氏の洗練された合理的な動きとは異なり、どこか呪術的なエモーションを感じさせるものだった。この巻紙はただのメモではなく、神官の祝詞や文楽大夫の床本と同じく、言霊の依代なのだろう。深澤氏は古代の巫女のように大地を踏みしめ、あるいは音楽にあわせて体を揺らせ、彼女の発する言葉のひとつひとつが見えざるものへの捧げ物であることを体現していた。　深澤氏の朗読の余韻のなかで思い出したのは、ono osamu bandの三人が登場するとき長唄囃子が用いられたことである。それは、祭祀に起源をさかのぼることができる芸能という大樹の、一枚の若葉となることを宣言するものだったのかもしれない。

■足立区小台とはとくに関わりのない三月の俳句

山又山山桜又山桜

鷹揚でゆったりとした印象を与える作品が、実は超絶技巧に支えられているということがある。

その短さゆえに言葉を極限まで切り詰め、省略することが求められる俳句で、ひとつの語を繰り返し使用するリフレインは、麻薬のように危険で魅力的なテクニックだ。音韻を作り出し意味を強調するという本来の効果はもちろんだが、それが俳句の基本的志向に反しているということ自体が、この技法の魔力なのかもしれない。

掲句では「桜」という文字が二回、「又」が二回、「山」にいたっては四回も使われていて、この三つ以外の文字はない。リフレインを二重にかさねるという大胆さとともに、遠景から近景へのダイナミックな展開がある。

一方で音数律としては、冒頭の2―2―2の6音で大胆に破調すると見せつつ、後半は7音、5音というオーソドックスな定型に回収される。安定した着地あってのアクロバットなのである。

※作者は阿波野青畝（1899年2月10日～1992年12月22日）

■次回のあらくれ句会はあらかわ遊園にて吟行。隅田川の桜は見事に咲いているでしょうか？　さっきから何度も「咲いている」が「最低る」に変換されるのは何故でしょうか？　（中村安伸）

■ Lee Wiley

大野円雅

十代の頃から好きな歌手の一人であったのだけど、以前にはここまで響いていなかった。最近ただただ、くり返し聴いている。

ポール・クグラー著『言葉の錬金術』によると、ドイツ語の「母」と「海」は、「Mar」と「Meer」、フランス語は「Mère」と「Mer」、ラテン語では「Mater」と「Mare」。その他さまざまな「母」と「海」は音韻的に結びついている、らしい。

これはもしかすると、かつてはわれわれの唯一の世界であった母という偉大な原始的なイメージが後には、全体世界の象徴となる、ということを指し示しているのではないだろうか。

というユングの言葉と一緒に紹介されている。漢字の「海」も「母」にサンズイが付いたものだ。この星で最初の生物が生まれた場所であり、そしてまたいつでも、何でもを飲み込んでしまう海。この女性の声をくり返し聴いていて、ふと思い当たったのはそんな話だった。

たなびく波のような、海面の光の瞬きのようなヴィブラート。そんな柔らかなものに、茫洋と儚いものが捉えどころのないまま、そのままに封じ込められているように思う。夢幻のすぐ下、強靭さが重なるのは、そんなものをそのまま閉じ込めるなんて、大それた夢を見られるほどの強さがあったからなのだろう。

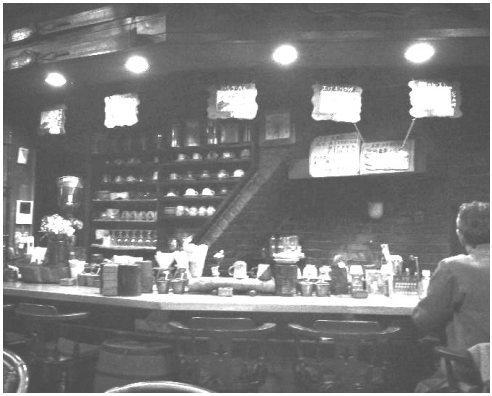
50年代の録音にしても、かなり古めかしくナロウに聴こえるのがちょっと不思議でもあるのだけど、それでも歌の上手さと雰囲気の良さでいつまでも聴いていられる。

それにしても。エーテル体が本当強そうで、しみじみと、わくわくする。突飛なことはしてないのに、このドライブ感。神秘的ですらあるのに、無闇に振り回されるのではなく、どこかへ確実に連れてってもらえる、フレーズのたびごと次々に未知の「着地」の夢を見させてくれる、このハンドルさばき。なので、「女はドライブ感」と、ちょっといってみる。

■荒川喫茶瞥々　カラビナ

荒川喫茶瞥々と名乗ったコーナーでありながら、ここ何度か、区外の喫茶店について書いていました。筆者はじつのところ荒川区在住ではなく、いかんせん、毎度荒川区の喫茶店についてレポートする訳にいかないのですが、なにとぞご寛容の許を願います。さて、今回は久しぶりに荒川区の喫茶店、町屋駅前にある「カラビナ」さんを訪れました。都電を降りて、暮れなずむ街の焼鳥のタレの匂いを抜けて…町屋駅前を夕方に歩くときは、呑みたい誘惑を克服するのに苦労しますね。表通りの賑やかさとは打って変わる一本奥の路地に「カラビナ」さんがあります。看板はあまり目立ちませんが、建物はずっしりとした存在感があります。

おそらくマスターは山がお好きで堪らないのでしょう、煉瓦の壁に重厚な木材の内装は、完全に山小屋の雰囲気です。火の入った暖炉でもあったなら、ここは町屋でなくて雪山の奥なのだと錯覚したでしょう。



天井の高い店内には振子時計の音がかちかちと響いています。オーダーはコロンビアコーヒーとエッグポテトサラダサンド。このお店には、ブレンド珈琲のほかにも、モカ、キリマンジャロなど各種の豆が置いてありました。マスターが豆を挽いて珈琲を淹れてくれます。サンドイッチのほうは、柔らかくて少し甘味のあるクロワッサンのようなパンに、優しい味のポテトサラダが挟んでありました。

小林孝圭

◆オーダー
コロンビア４００円
エッグポテトサラダサンド４５０円

◆店舗データ
カラビナ
東京都荒川区町屋２―８―６

NIGHTMARE PICTURES

オットー・ディックス　「玩具を持つネリー」

植物図鑑からそのまま取り出したような不自然な花々と、すでに傲慢さをすっかり身に着けたかのような身なりの良い子供の対比。咲き乱れる植物と幼児という、幸せでしかないはずの組合せを、どうしてここまで凶々しく描く必要があったのでしょうか。画家オットー・ディックスにしては、少なくとも表面的には平和な部類に入る作品なのですが、妙にひっかかる雰囲気を持っています。

店主の手記

あったかくなり、朝が少し楽になりました。楽になったと言っても結構遅いんですけど。朝が遅いと損した気分になります。そして実際損しています。

先日、店のHPへの不満が結構たまったところでリニューアルすべく夜な夜な作業をしていました。3日間くらい、朝4~5時くらいまで作業をするというのを繰り返し、そうすると起きるのが9時くらいになり急ぐことになります。これを例えば12時に寝て5時に起きれば夜中よりはパフォーマンスがいいだろうし、生活リズムとしても理想的に見えます。

しかし、0時前に寝るというのは本当に難しい。どう考えても不可能な気がしてなりません。今後の課題にしたいと思います。そして、なぜか完成もしていないのに新しいHPはリリースされました。おそらく飲食店としては最も力をいれなければいけないだろうメニューのページが手抜きすぎて、でもどうしたらいいかわからないので、しばらくそのままだと思います。

そうゆうことで私はwebを作ったりします。デザインあればお安く受けます。というのを書いてもきっと仕事は来ないのでCSS講座とかやって金にしてやろうとか少し考えます。

店のことはさておき、オダマガにも寄稿いただいてる滝沢朋恵さんのHPを誠に僭越ながら作らせていただきました。滝沢さんの情報を是非チェックしてみてください。

takizawatomoe.tumblr.com

今月から「試聴室 滝沢」が始まりました。高円寺にはお世話になっている斉藤友秋さんが月二回やっている「斉藤バル」もあります。月一回の「滝沢」は多分そうそういけないと思いますが、「斉藤バル」は常連になりたいです。なんだかこうゆうの楽しいですね。

うちもバー的な感じで使う人が増えれば出汁巻き卵やりたいです。

店主

■発行時点で決まっている店の予定

3/20（金）波、返し縫い
3/21（土）橋と音楽vol.10
3/22（日）写真とカメラの何か
3/29（日）あらくれ句会

詳細、最新情報は HP でご確認ください。

http://cafebrucke.org/

小台マガジン vol.7
2015 年 3 月発行
編集・印刷
BRÜCKE